

## 9 コウノトリと共生する水田における害虫・天敵等の発生状況

### ねらいと成果

2005年秋、増殖事業で育成された5羽のコウノトリが放鳥され、豊岡の空へと舞い上がった。肉食性のこの鳥は、水田・河川・湖沼といった水辺環境で餌を捕るため、餌場水田に生き物が豊富に存在することが重要であり、普及センターの指導の下で、地域ぐるみで水稲の減農薬栽培・無農薬栽培に取り組まれている。

そこで、コウノトリとの共生をめざした水稲栽培の基礎資料を得るため、こうした水田における害虫及び天敵等の発生実態を調査した。

その結果、無農薬栽培ほ場では、慣行栽培に比べイネミズゾウムシ成虫による被害が多発したものの、ウンカ・ヨコバイ類の捕食性天敵であるクモ類密度が高く、その密度抑制に繋がっていることが明らかとなった。

### 内容

豊岡市の円山川東岸の水田地帯において、無農薬5ほ場、減農薬3ほ場、慣行防除栽培2ほ場の害虫等の発生状況を、移植時から収穫時まで月2回定期的に調査した。

無農薬栽培では、移植直後にイネミズゾウムシ成虫による葉の被害が多く見られた(図1)ほか、コウノトリの餌となるコバネイナゴの発生量が、減農薬栽培や慣行防除栽培に比べ多い傾向を認めた。

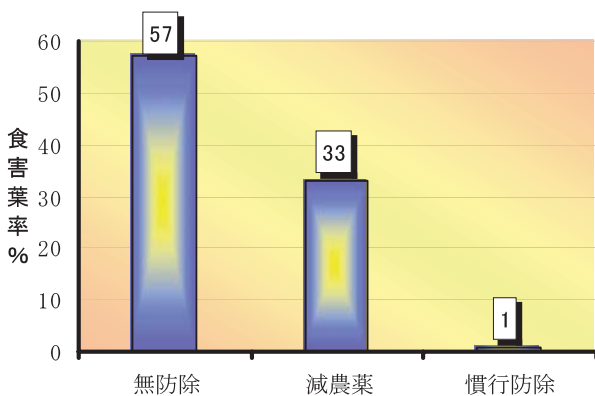


図1 イネミズゾウムシ被害

豊岡市 2005年6月13日 本田

注；無防除の被害株率は100% (要防除水準90%以上)

また、捕食性天敵のクモ類の密度も高く、セジロウンカ(夏ウンカ)の密度抑制に大きく寄与していると考えられる(図2)。

さらに、アメンボ類(アメンボ・カタビロアメンボの1種)、トンボ類(アキアカネやアジアイトトンボなど)、カマキリ類、カエル類(アマガエル・トノサマガエルなど)などの発生が多く、無農薬栽培圃場では昆虫をはじめとする動物相の多様化が観察された。

一方、カメムシ類による斑点米被害は、畦畔の草刈りがかなり徹底して実施されていたものの、全般に発生量が多かったため、いずれの栽培法でも等級低下に繋がる程度の被害発生が認められた。

2005年は全国的に見て、ニカメイガの発生は少なく、トビイロウンカの発生も平年並であったため、栽培法の違いを問わず、経済的被害に結びつく害虫発生や、明らかな減収被害は認められなかった。

### 今後の方針又は普及上の注意事項

防除体系の違いによる害虫と天敵相の変化を、さらに追跡して調査するとともに、水稲の生育・収量への影響についても検討する。

藤富 正昭 (北部農技・農業部)

(問い合わせ先 電話：079-674-1230)

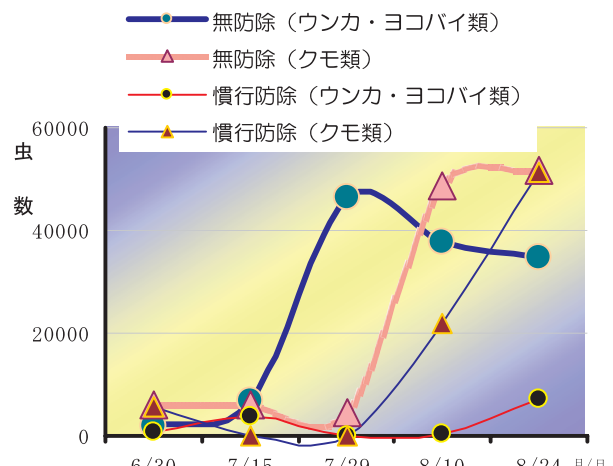


図2 ウンカ・ヨコバイ類密度とクモ類密度(払い落とし法 /10a)